

坂口安吾「群集の人」における孤独

藤原 温士

1

坂口安吾の「群集の人」は、同人誌『若草』第八巻第四号（1932年）の創作欄に発表されて以来、著者生前の単行本には収録されなかった。没後に冬樹社から発行された全集『定本 坂口安吾全集』第一巻（1968年）に初めて収録されたほか、その他全集や平凡社から出版されたモダン都市文学シリーズの『都会の幻想』（1990年）などにも収められている。しかし、他の安吾作品、例えば「墮落論」や「白痴」などと比べると再録された回数は少なく、「群集の人」に関する論文は、筆者の探した限りでは一本しか見当たらなかった。

はじめに言っておきたいのだが、本エッセイでは作品の価値評価そのものには重点を置いていない。そういう意味では、再録回数や先行論文の数はさほど重要ではない。ただ単純に、この作品の面白さについて書いてみようと思うからだ。具体的には、唯一の論文である、藤原耕作「坂口安吾『群集の人』論」を下敷きにしつつ、この作品の注目すべき点について書いていく。なお、論文の執筆者である藤原耕作と筆者である藤原温士が同姓のため紛らわしいので、前者のことは藤原、後者のことは筆者と表記することをここに述べておく。

2

まず、本エッセイで扱う「群集の人」のあらすじを簡単に記しておこう。——雑沓の街こそ静寂であり、「孤独なる喜び」を享受できると考えていた班猫蕪作先生は、大学を定年で辞めて以後、「紋切型の社交」を避けて

銀座の路地裏へと引っ越してきた。それからは毎日、雑沓にまぎれて孤独を感じることを楽しみとしていた。そんなある日、一人でいる以外は普通の青年に「一人の肉親」を見出したような「懐かしい思い」を抱いた先生は、彼の後をつけることにした。悪戯に人の後ろを追いかけるだけならば、先生にとって珍しくもない行動である。普段ならば見失うまで追いかけてから、そのまま自宅に帰る先生も、その日に限っては見知らぬ土地へと迷い込んでしまう。そこには人通りも少なく、車も捕まらないので、先生は仕方なく歩いて帰ろうとする。ところが、その途中で見つけた赤い煉瓦の洋館に「奇妙に懐かしい思い」がした先生は、吸い込まれるように中へと入ってしまう。洋館の中で異様な緊張感を味わったのち、奇妙な呻き声の正体が子供の母を呼ぶ声だと理解すると、先生は洋館を抜け出して自宅へと帰ってゆくのであった。自宅のアパートへと帰ってからすぐにでも眠ってしまおうとすると、そこにはすでに見知らぬ先客がいた。そいつに声を掛けて顔を見てみると、それはなんと先生自身の死体であった。驚きのあまりすっかり腰を抜かしてしまった先生は、どうすることもできずに自分の死体の胸に顔をうずめて、「お母さん、お母さあん、お母さんてば……」と泣き喚くことしかできず、やがて「熱くるしい泪の奥へ声も身体も意識もだんだん縮んで細くなり、消えていってしまうのが感じられた」。翌朝、目を覚ました先生は真っ先に雑沓へと飛び出し、「昨夜のことは、あれはみんな夢であるという風にしか思い出すことが出来なかった」。これが「群集の人」のあらすじである。

この作品を読んだことのある人はもちろんのこと、このあらすじしか読んだことのない人でも、真っ先に気になるのがその終わり方だろう。自分の死体に出会うというショッキングなシーンの直後に、まるで夢オチのような結末しか用意されていないというのは、読者にとっては不満の残る部分である。このように感じてしまうのは、それまでのくだりに読者を期待させるような要素が詰め込まれていたからに他ならない。先生の言うところの孤独の意味とか、先生の追いかけた青年の存在とか、赤い煉瓦の洋館

とか、読者を引き寄せる要素ならば作品中にたくさん存在するのだ。何かが起こりそうな予感がしたのに何も起こらなかったのも、読者は肩透かしを食らってしまって当然である。

藤原はこれを「謎」と呼び、「初期安吾文学の孕んでいる問題に、そのまま直結している」と述べている¹。また、「ここで私がやりたいのはそうした作品論的な『謎解き』ではない」とも言っており²、藤原は他の初期安吾文学の作品との比較を通して、「群集の人」を説明しようとしている。真正面から「謎」を解くのではなく、初期安吾文学に共通するモチーフを見出すことで、「謎」に説明を与えようというわけだ。そのためだろうか、確かに藤原の解釈や指摘には参考になる部分もたくさんあるものの、論文それ自体が「群集の人」論というよりは「初期安吾文学」論に近くなってしまっている。これは「群集の人」論としては正直物足りないものだ。ならば、筆者は藤原が直接的には行わなかった「謎解き」に近いことをしてみようと思う。具体的には、作中の「謎」を解くことはできなくとも、何らかの解釈を与えることで、藤原とは違った視点から「群集の人」論を書いてみようと思う。

では、それぞれの「謎」について考えてみよう。この作品を読み始めて最初に引っかかりを覚えるのは、先生の孤独に対する態度ではないだろうか。一人だと孤独を感じ、人々と交流することで孤独が和らぐというのが普通である。安吾が元ネタにしたと考えられる、エドガー・アラン・ポーの同名作品に登場する老人などがその典型である。この老人は、人通りが少なくなると、人のたくさんいる場所を探して街中を動き回り、人混みに紛れようとする。一人ぼっちであることに耐え切れず、自分が孤独を感じない場所としての人混みを求めているのだ³。一方、安吾の老人（先生）も人混みへと繰り出すところまでは同じである。ところが、その目的は正反対で、一人であるよりも孤独を感じることがするために人混みへと出て行くのだという。雑沓の街においては、人々がお互いに無関心であるため、より孤独を感じられるというわけだ。この通常とは違っている感

覚はなかなか理解しがたいが、藤原が言うには、「多くの初期安吾作品の登場人物達に共有するもの」であるらしい⁴。確かに、藤原の紹介している初期安吾作品の登場人物たちは先生のように孤独を徹底しており、そこに「孤独なる喜び」を見出しているようだ。この独特な孤独の説明として、藤原は「文学のふるさと」の言葉を引いている。曰く、「安吾語」としての孤独とは「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」である、と⁵。藤原はこの定義を用いて持論を展開していくものの、「群集の人」の作中の言葉でないことや発表年代が十年ほど異なる作品からの引用であることを考えると、いささか説得力に欠ける論理である。

また、藤原は「班猫先生は、この作品において、彼の『孤独』を徹底することで、『ふるさと』へと、彼の生まれてきたところへと還る体験をしている」とも述べている⁶。ここで言う「ふるさと」とは、いわゆる「安吾語」の一つで、安吾が好んで用いたモチーフである。藤原は初期安吾文学を説明するときこの言葉を好んで用いる傾向があるため、「群集の人」の内容に沿って言い換えると、「ふるさと」ではなく「母」というべきだろう。そうすると、この藤原の主張は、物語の「謎」に対する解釈として説得力があるようにも思える。しかし、藤原の主張が成り立つのは、先生が本当に孤独を徹底していれば、という条件が満たされたときである。筆者がわざわざこういう言い方をするのは、先生は孤独を徹底できていない、と考えるからだ。その根拠として挙げたいのは、先生の行動の矛盾についてである。班猫先生は「独身で通したので、もともと一人ぼっちであった」ので、家族という「団欒」も持っていなかったようである。ずっとこの状態が続いていれば、先生は「孤独」を徹底していると言えるだろう。しかし、この態度は一貫したものではない。先生は家族を求め、ずっと孤独であり続けようとはしていない。例えば、街で偶然見かけただけの青年に「一人の肉親」を見出したような「懐かしい思い」を持つのは、今はもう触れ合うことのできない家族への飢餓感の表れではないだろうか。先生にとっての青年が、孤独の享受の仕方に関して自分に似ているだけの存在ならば、「一

人の肉親」ではなく、同志を見出したような気分になるほうが自然である。これは先生の態度がぶれていることを示す箇所であると考えられる。

赤い煉瓦の洋館へと入ってゆく箇所で「奇妙に懐かしい思い」を先生が抱くのも、無意識に家族を求めているからではないだろうか。何よりこの洋館は「夫婦者アパート」である。先生がそこに家族の温もりを見出したとしても不思議ではない。また、洋館の中で子供の声を聞いたのち、先生が「お母さん。俺だって昔は子供であった」と思う箇所では、先生の「母」への飢餓感が表現されている。洋館の中に入る行為は母体回帰あるいは幼児退行のメタファーとして読むことができる。両者とも子供になって「母」を求める行為である。また、最も分かりやすく「母」を求めるのは、先生が自分の死体に出会ってしまい、「お母さん、お母さあん、お母さんてば……」と泣き喚く箇所だろう。嘆くときに発する言葉が「お母さん」だけである、というのは注目すべきだろう。

このことから、先生は「孤独」を徹底しきれていないと考えられるため、藤原の主張はあまり説得力を持たないことが分かるだろう。ならば、作中の「謎」はどういう意味があるのだろうか。いくら家族への飢餓感があつたとはいえ、自分の死体の胸に顔をうずめて「母」を呼ぶという行為は、一読しただけでは意味不明である。以下では、この「謎」を説明するために、筆者なりの解釈を述べたいと思う。

ここで筆者が導入したいのは、死とは根源的に孤独な営みである、という考え方だ。死という行為は独りでしか行うことができない。生前、どれだけ家族や友人と交流していても、人が死に直面するときは独りである。死は孤独と深く結びついているのだ。それゆえに、人は誰しも死を連想させる孤独を恐れるのだ。無論、先生もその例外ではない。そこで、先生は「孤独」を親しむべきものだと考えた。人間関係の孤独という表面的な孤独に対して、恐怖する必要がない、と思い込むことで、根源的な恐怖を隠蔽しようというわけだ。あるいは、根源的な恐怖に直面したときのショックを減らすために、表面的な孤独に積極的に触れて、「孤独」に慣れておこう

という意図があったのかもしれない。どちらにせよ、無意識下で先生は根源的な恐怖である死への耐性をつけようとしていたのである。

だが、このような先生の考えは破綻してしまうことになる。物語の最後で、いざ自分の死（体）に直面すると、それまでの努力が無駄であったことが分かり、先生は死という根源的な恐怖に狼狽して、何も出来なくなってしまうのだった。死の恐怖がもたらした衝撃によって、先生の行っていた心の準備は無へと帰してしまった。そうなってしまうと、先生も一人の弱い人間でしかない。むしろ、なす術なく「お母さん、お母さあん、お母さんてば……」と泣き喚くだけの子供である。ここで「母」を呼ぶのは、藤原が主張したように、「母」が初期安吾文学の共通するモチーフだから、という理由からではない。死を目の前にした人間が、本能的に生の象徴である「母」を求めたというだけなのだ。

そして、この衝撃的な事件の後が夢オチのような終わり方になっているのは、自分が死に直面したという事実をどうにか無意識下に抑圧しようという、先生の態度を表しているのかもしれない。しかし、この抑圧も先生が実際に死を迎えるときには意味がなくなってしまうことは容易に想像が付くだろう。

【注】

1. 藤原耕作「坂口安吾『群集の人』論」『解釈』第四十五巻、第一・二号、1999、50頁を参照。
2. 藤原、52頁を参照。
3. ただし、ポーの作品の冒頭にも「群集の中の孤独」は出てくる。「群集の人」（中野好夫訳）、『ポー全集』全三巻（東京創元社、1969）、第一巻、615頁を参照。
4. 藤原、53頁を参照。
5. 藤原、54頁を参照。
6. 藤原、54頁を参照。

藤原 温士

【参考文献】

坂口安吾「群集の人」鈴木貞美編『都会の幻想（モダン都市文学）』（平凡社、1990）、
364-72 頁

藤原耕作「坂口安吾『群集の人』論」『解釈』第四十五巻、第一・二号、1999、50-56 頁
エドガー・アラン・ポー「群集の人」（中野好夫訳）『ポオ全集』全三巻（東京創元社、
1969）、第一巻、613-24 頁